



同志社人物誌 (21)

松岡荒村

天 野 茂

後の精査のたのしみもあるわけだが、それにしてもそう多くは期待できないと思われる。

1

明治三十三年三月(二十二才)同志社中学校を卒業したことは明らかだが、在学当時の記録などはなく、その後三十五年三月までの二カ年間は、高等学部文科学校に在籍はしていたものの、現在同志社高校に保存されているその三十五年三月の成績表では、どうしたことか高等部文科一年級として名前があげられており、しかも成績はわずかに英会話一科目のみに記入があるにすぎない。おそらくこの二カ年間は、教室に出ることも少なく、大方は学外で行動していたものであろう。その間、洛陽教会青年会の一員として、明治三十四年の大挙伝道などに活動していたことは、幸いに「洛陽教会目誌」によって知られる。思うに、中学校当時心服師事していた副校長安部磯雄が、明治三十二年五月東京専門学校に転出した後は、同志社も荒村にとって魅力の乏しいものになったのもあろう。またその頃は、かれ自身も「哀恋の書」にいうごとく悲恋に苦しむ身であり、さらに、最も親

「歴史の古い同志社からは、いわゆる『変り種』とか『叛逆者』などと呼ばれる青年を輩出している。山川均・高畠素之・遠藤無水などという同志社としてはあまり歓迎されなかった人々はその例であるが、松岡荒村もそうした部類の一人である。したがってこれらの人々について知ろうとしても、同志社内部の記録からは探し出せない。」

右は、住谷悦治総長先生から拙著『松岡荒村』の序文としていただいた文章の冒頭であるが、確かに荒村についてはお言葉の通りで、同志社内部の記録からは何程のこととも知り得なかった。資料全部にあたってみただけでもなく、あるいは荒村の演説のことなどが載っているかもしれない明治三十年前後の「校友会報」の類も未見なので、断定はできず、今

愛していた末兄雅人が、故郷熊本の養家にあつて新田思想の相剋に苦しんだあげく悶死するというような悲劇に直面しては、学業などに手のつかぬ思いであつたとしても、無理のないことといえよう。青春失戀の傷手と人生不安の念とに堪えられぬ思いから、三十三年の晩夏初秋の一ヵ月余を、明石・播州方面の海岸を放浪、時には自殺の衝動にかられることもあつた。この時のかれは、おそらく『若きヴェルテルの悩み』を懷中していたことである。感銘の箇所に二本も三本も赤や青の線をひいた小型本の『ヴェルテル』は、死にいたるまで愛蔵するところであつたという。

「ハムレットに於て狂女を憐む」「ヴェルテルズムを論じて自殺に及ぶ」「自殺に対するヴェルテルが観念」などの文章に当時のかれの憂愁がこめられているが、これらを記しとめた後、翌三十四年になると再び洛陽教会にあって、先に述べた大挙伝道や、同志社で開かれたキリスト教夏季学校や、あるいは洛陽教会における青年演説会などで、キリスト教学徒としてのかなり活発な活動を行なつてゐる。

2

当時の同志社は、綱領削除問題に端を発する学内紛争、学制改変の騒ぎなどは一応落着いていたが、アメリカン・ボードの圧力を快しとしない有能教授の多くが、たとえば浮田和民・柏木義円・安部磯雄・湯浅半月などがひきつづいて学外に去り、学生もまたストライキ処分による退学者や、学校を不満とする転学者などが続出して、いわば校運全く不振の状態にあつた。このような有り様の同志社における修学を断念した荒村は、いよいよ安部磯雄師の後を追う早稲田遊学を決意し、その学資出費を条件に三十五年四月から一ヵ年間岐阜の濃尾育兒院に働くことを、三十四年九月に契約した。この頃からようやく同志社の異端児としての荒村の激情的行動が目につきはじめるようである。洛陽教会においても、その直情直言、多血質の性格は、ある時は先輩宗教人や宗教界攻撃の悲憤感話となり、ある時は同志社神学部出身の同教会牧師溝口貞五郎から、教会を奪おうとするのではないかという猜疑の眼で見られることすらあつたようである。翌三十五年二月以降のことであるが、「噫狂人田中正造翁」と題する鉅毒問題講演が縁となつて、京都府高等女学校

国漢專攻科生志知文子と交際をはじめた際、同校河原一郎校長が文子に対して、相手は怖るべき青年だといふから交際をやめるようにと忠告したということからも、当時の荒村については一部よからぬ風評もあつたことが察せられる。

ともすればそのような風評の原因にもなりかねなかつた持ち前の激情的性が、社会正義感と結びついて、荒村の真面目を発揮しはじめたのは、三十四年十二月の田中正造直訴事件を契機とする鉅毒事件への関心においてである。すでに安部磯雄によつて眼を開かれていた社会問題―貧困・貧民売女問題など―への意識が、この鉅毒事件によつて実践活動へと結びつき、キリスト教人道主義から社会主義へと歩をすすめてゆくその後の荒村の人生行路の出発点をなしたと、つづく岐阜時代の貧孤児救済活動、さらに三十六年三月以降東京へ出ての安部磯雄を会長とする社会主義協会入会、同会員としての鉅毒問題・車夫問題についての活動、およびその間の社会主義詩人としての作品、さらには平民社につながる反戦文学者としての戦争文学並びに国歌君が代に対する批判などの一切については、ここ

では省略したい。ただ、わたくしは最近笠原芳光氏や武田清子氏の論著によって、柏木義圓の「教育勅語と基督教」〔同志社文学〕以来『上毛教界月報』へとつづくその国家主義批判・非戦論・生命尊重思想などを知り得て感動した。荒村の場合には、その「国歌としての『君が代』」（三十七年四月）の一篇に結集した反体制の思想・行動は、何分短時日かつ単発的であつて、柏木の長期にわたる徹底した活動には比すべくもないが、しかも『君が代』の曲は、あまりに君主主義にして、今一步をあやまれば、わが幾億の同胞をして永久尚且君は即ち国家なりてふ頑迷なる觀念に迷惑せしむるの非運に到らむかを恐る。」と直言してはばからない凛乎たる姿勢においては、荒村もまた義圓同様、「国家権力からの自立精神」（笠原氏）を新島襄と同志社立学の精神から継承したものとすることが出来る、と思つた次第である。このことを述べて阿氏に謝意を表しておきたい。

3

以上の通り、自由主義と実践主義とを特色とする（笠原氏）同志社のキリスト教が、主

として安部磯雄を通して、社会主義者荒村を培つたといえると思うのであるが、同時にもう一つの側面として、聖書、特に旧約聖書を通して、キリスト教文学者荒村を形成した点もあると思うので、以下そのことにふれておきたい。

荒村は、洛陽教会所屬のキリスト教青年会員であり、その委員をつとめ、また同教会日曜学校教師をも担当していたが、果して正式にキリスト教に入信していたかどうか、それは不明である。したがつてかれをキリスト教文学者と呼んでいいのかどうか、疑問である。ともあれ荒村は讃美歌を愛唱し、「愛誦の讃美歌」「愛誦余韻」などの文章では、文字通り讃美歌を讃美している。また聖書では、新約よりは旧約を愛好したらしく、とりわけ「詩篇」および「雅歌」は、かれの繰返し引用するところであり、「詩篇第四十二」の「ああ神よ、鹿の深水をしたひ喘ぐが如く、云々」は、かれの理想主義生命觀の根本信条となつたものである。かれがこのように新約よりも旧約を好んだのは、大ざっぱな言い方ではあるが、かれが信者・求道者であるよりも、よりいっそう詩人であつたからだと思われる。

かれは、ゲート・カーライル・バイロン・キーツ・ワーズワース・シェレー・透谷・藤村などの浪漫詩に革命の泉を掬むとともに、旧約予言者の物語からも、カーライル「英雄及び英雄崇拜」同様、志氣と詩心の刺激鼓舞を受けたのであつた。

『荒村遺稿』所収の聖書文学作品としては、日曜学校の子供たちにキリスト生誕の意義を説いた短章の「聖誕の日」を初期作品として、死去の年三十七年二月といえはおそらく葉山静養期の作と思われる「希伯來詩の想源」に至るまで、感想・小詩・評論合せて約十篇の少量にすぎず、質的にも「希伯來詩の想源」その他一二を除いては、特に異色あるものとは言えない。ただ、もう三年前になるが、『荒村遺稿』未収の拾遺作品二篇が、立教大学図書館伊沢平八郎氏によって、立教大学ミッシェンの機関誌『築地の園』誌上に発見された。その一篇「棕櫚の蔭」聖劇の一役」（明治三十五年十二月）という未完の劇詩を見ると、荒村の旧約聖書文学作品は、同志社中学時代に安部磯雄とともにその教えを受けた湯浅半月の導きによるものではないかと推定される。半月の史詩「十二の石塚」は、かれ

が明治十八年六月同志社卒業の時の、卒業論文として制作朗誦したものである。題名は、ヨシユアがカナン征服のためにヨルダン河を渡ろうとした際、神威によって河の流れがせきとめられたという奇蹟を記念するギルガル丘上の十二の石塚の故事によるものであり、主人公エホデが母から十二の石塚の由来をきいて発憤、長じてエリコ城に父の仇を討ってイスラエルの士師と仰がれた物語を内容とする。旧約のヨシユア記及び士師記に従ったものであるが、荒村の「棕櫚の蔭」もまたヨシユア記を中心に、カナン征服の歴史的懷古を歌おうとしたものらしい。まずその緒として、エリコ城門の外の棕櫚の蔭に盲人バルティマイとその子チリオンを点出する。バルティマイは、その子にモーゼの故事を語ってきかせるが、棕櫚の蔭から遠くに指させるはずのモーゼのさまよった山野を、今は盲目のために見るすべもないことをなげく。そこにナザレのイエスを通りかかり、その神威によって盲人バルティマイの目が開かれる、という序のところで未完のままに終っている。この荒村の劇詩は、形式はかれの私淑した透谷の劇詩にならったものであり、「十二の石塚」

の叙事詩形と相異はするが、素材の上から、また想像される主題、構想の上からみると、「十二の石塚」の先蹤にならおうとしたものであると推定される。半月は、明治二十四年六月米國留学から帰朝、同年九月以降三十二年四月平安教会の牧師職につくまで、同志社教授として在任、旧約聖書文学の講義を担当していた。明治三十二年三月撮影の同志社中学四年級の記念写真には、横井時雄・安部磯雄・本多精一らとともに荒村恩師として同写している。直接聴講の有無はともあれ、特色ある詩人教授半月の旧約聖書文学講義が、荒村を旧約聖書愛好に導いたという推論は十分に成りたち得ると思うわけである。

ただわたしには残念ながら、荒村の聖書文学の価値を判定することはできない。その代表作「希伯來詩の想源」についても、ギリシヤ文学の艶麗に対比して、ヘブライ文学の深遠幽玄を説くところ、文章の格調も高く、まさに「荒村遺稿」の巻頭を飾るに足る雄篇であると思う、と言えるだけである。この機にこの誌面をお借りして、キリスト教文学に精しい辻橋三郎氏ら同志社関係の諸賢に何分の御教示を賜りたいとお願ひする。

従来荒村の文学については「透谷のラディカルな継承」という小田切秀雄氏の評価が定評とされ、わたしも氏に導かれて、荒村の浪漫・社会主義文学の側面の考察は、拙著その他において若干は試みて来た。その際、キリスト教乃至はキリスト教文学の側面もゆるがせにできないとは気づきながらも、自分の力不足のために、強いてとりあげないで済ませてきた。今回はからずも本誌上に紹介の機会を与えられてみると、どうしてもこの面を伏せておくことは許されなないと思え、ますます筆の重さを感じたのだが、せめてこの面のあるところとだけでも記して、貴重な機会をいただく責に任じたいと思い、敢て舌足らずの筆をとった。

4

キリスト教文学としての評価はともあれ、この面のある荒村の人間を考えると、やはり荒村は同志社人であったということだけは言えそうである。「変り種」であり「異端者」であつたには違いないが、そればかりではなかったとも思われてくる。人品としても、熊本人としての古武士的気節、志士の清教徒的

端厳さにおいて、安部磯雄が「理想の人」とするゼントルマンの一面はあったと思われ、「表面は冷静、内部は烈火」が安部磯雄その人だとすれば、年の若さ、短命の生涯のゆえに、人物の完成度、表面の冷静さにおいては及びもつかないけれども、内部の烈火、その情熱性においては、安部師に比べても敢て遜色はないのではなからうか。その文学、その思想、そしてその実践力、それらの根本にあるものを荒村の「元氣」というならば、それは新島襄が同志社人に期待して止まなかった「良心の全身に充滿したる丈夫」の「元氣」とも、そう軒輊のないものではなかったかと思えるのは、未完成を惜しむあまりの過責となるであらうか。ともあれ、彼岸の世界では、一級上の山川均などとともに、新島先生や安部先生から親しく「松岡さん」と呼ばれ、「あなたは若死するだけに少しくいそぎすぎましたね」などと、いたわりの言葉をかけられていくことでもあらうと思うのである。同志社精神を知らぬ者の妄言であれば、厳しい叱声を仰ぎたい。

(比治山女子短大助教授)

1967年度 同志社各校入学案内

学 校 名	募 集 人 員	願 書 受 付	試 験 日	合 格 発 表
女 子 大 学	英文 約250名	1類		
	音楽 約 25名	1月9日～1月31日	2月 6, 7日	2月11日
	家政 約 50名	2類		
	食物 約100名	2月20日～3月4日	3月 9, 10日	3月14日
高 等 学 校	約120名	1月16日～2月15日	2月17, 18日	2月23日
商業高等学校	1次 約150名	2月1日～2月24日	2月25日	2月27日
	2次 約50名	3月1日～3月24日	3月25日	3月27日
女子高等学校	約 45名	1月10日～2月13日	2月17日	2月18日
香里高等学校	約200名	2月1日～2月11日	2月15, 16日	2月20日
中 学 校	約300名	2月1日～2月21日	3月1日～4日	3月6日
女子中学校	約240名	1月10日～2月24日	3月 1, 2日	3月4日
香里中学校	約150名	2月17日～2月25日	3月 1, 2日	3月4日
幼 稚 園	3年保育 15名 2年保育 25名	12月1日～12月31日	1月11, 12日	1月14日